

ミツバチを利用した半促成ナスの着果促進技術体系の開発

1 中核機関・研究総括者

群馬県農業技術センター 宮本 雅章

2 研究期間

2004～2006年度（3年間）

3 研究目的

半促成ナス栽培では、マルハナバチを利用した交配による着果方法が普及している。しかし、環境省の移入種対策小委員会によるセイヨウオオマルハナバチの環境への悪影響に対する指摘から、今後のマルハナバチ利用が危惧されている。そのため、ミツバチの安定利用技術およびミツバチ利用による省力高生産技術などの開発により、マルハナバチの代替としてのミツバチの利用技術を開発する。

4 研究内容及び実施体制

① ナスにおけるミツバチの安定利用技術の開発（玉川大学学術研究所、群馬県農業技術センター）

ナスに対する訪花特性の解明、フェロモン剤の利用やミツバチの記憶学習能力を活かした訪花のための誘導技術の開発、ミツバチの幼虫数と給餌の必要性の分析による群の長期維持管理技術の開発を行う。

② ミツバチ利用による省力高生産技術の開発（群馬県農業技術センター）

水封マルチ等の簡易な保温技術によるミツバチの導入時期前進化技術の開発、安定着果及びA品率の向上のための草姿改善による高生産性草姿管理技術の開発を行う。

5 目標とする成果

ナスの半促成栽培において、ミツバチの速やかで安定した訪花活動、ミツバチの長期維持管理技術による巣箱の購入費削減、低温期のホルモン処理作業の期間短縮および草姿改善による高生産性を可能とし、ナスの半促成栽培におけるミツバチの利用技術体系が確立される。これにより、ナスの半促成栽培にマルハナバチの代替としてのミツバチの利用が図られ、北関東地域におけるナスの半促成栽培において、経済的で安定した生産が期待される。

